

実践例「学校・学級経営の深化・充実」

「課題2 ふるさとで学び、新しい時代を拓く、開かれた学校・学級経営の創造と推進」

I. 学校名 幌延町立問寒別小学校【宗谷管内】

II. 研究の概要

1 研究主題について

自ら未来を切り拓く子の育成～学びのサイクルを通じて～

2 研究の概要

○主題・設定の理由

① 今日のな学校教育の課題から

平成28年12月21日中央教育審議会の答申には、「近年顕著となってきたのは、知識・情報・技術をめぐり変化の早さが加速度的となり、情報化やグローバル化といった社会的変化が、人間の予測を超えて進展するようになってきていることである。」と予測困難な時代へと変化していることが話題となっている。また、同上答申で知識について「個別の事実的な知識のみを指すものではなく、それらが相互に関連付けられ、さらに社会の中で生きて働く知識となるものを含むもの」とあり、教科横断的な発想のみならず社会における様々な場面で活用できる知識として身に付かせることが重要だと述べられている。このような背景から、主体的に児童生徒が課題を見つけ、解決のために模索し、そして社会で活用できる知識として身に付かせるよう意識し、意識させることが大切である。

② 児童生徒の実態から

本校の児童生徒数は年々減少している現状がある。授業において、自分の考えを基に他者と比較することで学習を深めたり、より良い方法を考え選択したりといった機会は乏しい。そのため、主体的に学習に向かう力が高まりにくい現状にある。

このような現状を踏まえ、児童生徒の興味・関心に訴えかけ、主体的に授業に取り組むということが必要であると考え。そのために、学習した内容を自分自身の言葉として説明したり、記録したりすることで生きて働く知識・技能となり、表現力により磨きがかかると考えられる。また、生きて働く知識・技能により主体的に見通しを持つことができるため、これらの点を充実させていきたい。

○研究主題・副題について

・「自ら未来を切り拓く」とは

新しい時代に必要となる資質・能力の育成として、以下の3つのポイントを重点としている。

- ① 学びや人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養
- ② 生きて働く知識・技能の習得

③ 未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力の育成

以上の観点から、新しい時代、いわゆる予測困難な時代を生きるためには、他者との協働や対話の中で、社会的変化にも柔軟に対応するための力、いわば「解決力」が求められる。ただ、「解決力」だけでは豊かな社会を切り拓き、持続可能な社会の創り手(創造する)となることは難しい。主体的に考えるだけでなく、自ら課題を見つけたり、解決方法を考案したり、習得した知識及び技能を何らかの形で生かすことができないかと思いをめぐらすという、言わば「創造力」も必要不可欠になるのではないかと考える。

豊かな社会を切り拓き、持続可能な社会の創り手となるためには、「解決力」と「創造力」が必要であり、そのためには「自ら」という児童生徒の主体性は必要不可欠である。研究で目指す子ども像と関連させて主体性を身に付け、促進させ、「未来を切り拓く子」を育成することを研究の視点として扱っていきたい。

・「学びのサイクル」とは

学びのサイクルとは、前項であげた「新しい時代に必要となる資質・能力の育成」の3つのポイントの中でも、①にあげた「学びや人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養」を重要視している。

また、前項であげた振り返りのポイントを整理すると次のようになる。

・「今日は何を学習したのか」(既習事項の確認)

・「本時の課題に対して自分の力でどのくらい達成できたのか」(個人内評価)

・「どのような方法で課題を解決することができたのか」(方法・手立ての習得)

あくまでも仮設ではあるが、学びを一単位時間の知識・技能でとらえるのではなく、抽象化させた振り返りにより、生きて働く知識・技能の習得につながるのではないかと考える。また、それを活用した思考・判断・表現を行うことで、より精度の高い実践をすることができる。そして、実践することで新たなことを学び、今後の課題に対してどうすべきか考え、また次の学びへ生かせる。このように、自ら計画を立て、実行し、それに対する評価を行い、改善するといったPDCAサイクルを自発的に行うことを、ここでは「学びのサイクル」と位置づけ、意図的に児童生徒に働きかけることを目的と定めたい。

ただ、全ての観点における振り返りを一単位時間に行うことは、教科や単元において困難をきたすことが予想され、「活動あって学びなし」の状態になってしまう。教科に応じて、一単元を通して振り返りを無理なく、適宜行うことに注意していただきたい。そのため、以下に問題解決的な学習の基本的な流れを提示するが、教科の特性に応じて弾力的に組み替え、学びのサイクルによる主体的な取り組みとなることを抑える。

☆問題解決的な学習の基本的な流れ(振り返りを生かして)

- 問題との出会い → 疑問や問題意識 → 自分の問題として捉える
- 解決しようとする意欲 → 解決への見通し → 解決に向けた作業
- 解決された内容の共有 → 吟味・整理 → 新たな問題の発見

○めざす子ども像

学校教育目標から

- ・自ら考え行動し、自立して社会を生き抜く力を育む教育の推進

研究でめざす子ども像

- ・主体的に課題を見つけ、問題解決に向かう子ども
- ・対話したり、情報を比較したりしながら深く考える子ども
- ・学んだことを振り返り、新たな学びへと向かう子ども

○研究の仮設

仮説1

学びの振り返りを生かすなど単元や課題等の設定を工夫することにより、主体的に課題意識を持ち、解決への見通しを考えることにより、新たな学びへと主体的に問題解決に取り組むことができるだろう。

仮説2

問題解決場面において、自分の考えを基にして対話したり、情報を比較したりするなど思考の手立てを効果的に設定することにより、自らの考えをより深化させることができるだろう。

○研究の視点

《仮説1についての視点》

視点1: 振り返りを生かし、見通しを持って取り組むことができる単元・授業構成

■ 振り返りを生かすための、振り返りにおける3つのポイント

- ① 「今日は何を学習したのか」(既習事項の確認)
- ② 「本時の課題に対して自分の力でどのくらい達成できたのか」(個人内評価)
- ③ 「どのような方法で課題を解決することができたのか」(方法・手立ての習得)

視点2: 子どもが主体的となって取り組むための教員の関わり

■ 発問や声かけの工夫 ■ 単元設定の協働作業(教員と児童生徒)

《仮説2についての視点》

視点1: 発達段階や課題に応じた効果的な思考の手立て

■ 深化させるための方法 ■ 教科や課題の特性を生かした教材やワークシート

視点2: 子どもの考えを深化するための学習活動及び評価

■ 教科や課題の特性を生かした学習活動 ■ それに関わる評価

○研究計画

令和1年度 基盤づくり P: 研究主題の全体把握、研究内容の設定

D: 理論研修、授業実践と研究

C: テスト、アンケートなどの分析考察、1年次成果整理

A: 成果と分析の課題、全体計画改善

重点内容 仮説1: 視点1 仮説2: 視点1

令和2年度 深化・充実 P: 改善計画提案、研究内容設定

D: 理論研修、授業実践と研究

C: テスト、アンケートなどの分析考察、2年次成果整理

A: 成果と分析の課題、全体計画改善

重点内容 仮説1: 視点1 仮説2: 視点1

令和3年度: 発展 P: 改善計画提案、研究内容設定

D: 理論研修、授業実践と研究

C: テスト、アンケートなどの分析考察、3年間の研究成果整理

A: 成果と分析の課題、次の研究方向性確認

重点内容 仮説1: 視点1・2 仮説2: 視点1・2

○全体構造図

《学校教育目標》

自ら考え行動し、自立して社会を生き抜く力を育む教育の推進

- 健康で明るく、たくましく生きる実践力をもつ子ども(強い身体：体・カラダ)
- 自ら学び、考えを深め、自分で判断できる子ども(豊かな知性：知・アタマ)
- 自然を愛し、豊かな感性と思いやりの心をもつ子ども(豊かな心：徳・ココロ)

研究主題

自ら未来を切り拓く子の育成 ～学びのサイクルを通じて～

《研究でめざす子ども像》

- ・主体的に課題を見つけ、問題解決に向かう子ども
- ・対話したり、情報を比較したりしながら深く考える子ども
- ・学んだことを振り返り、新たな学びへと向かう子ども

仮説 1

学びの振り返りを生かすなど単元や課題等の設定を工夫することにより、主体的に課題意識を持ち、解決への見通しを考えることにより、新たな学びへと主体的に問題解決に取り組むことができるだろう。

視点 1

振り返りを生かし、見通しを持って取り組むことができる単元・授業構成

視点 2

子どもが主体的となって取り組むための教員の関わり

仮説 2

問題解決場面において、自分の考えを基にして対話したり、情報を比較したりするなど思考の手立てを効果的に設定することにより、自らの考えをより深化させることができるだろう。

視点 1

発達段階や課題に応じた効果的な思考の手立て

視点 2

子どもの考えを深化するための学習活動及び評価

小学校部会

中学校部会